

# 小林人

こばやしびと  
Vol.44



トロフィーを掲げる中窪さんと父の勝さん。「全国に日本一の宮崎牛をPRできたことが何よりうれしい」と笑顔を見せた。



Photo 1 受賞した牛の枝肉。1キログラム8560円と通常の約4倍の値がついた。2 息子翔くん(しょうくん)に野球を教える。子どもとの時間が最もリフレッシュできる。3 母牛と子牛。祖父のころは50頭ほどだったが、現在、350頭以上を養うまで規模を拡大した。4 自家製飼料をつくるため約8畝のトウモロコシ畑の栽培もしている。



牛が食べやすいように餌を寄せている。「一つ一つの積み重ねが結果につながる」と話し、真剣な表情で仕事に取り組む。

「日本一」の宮崎牛を手掛ける和牛農家が多くいるこのまちで、安定して高品質の肉を送り出すその高い上物率から、一目置かれる農家がいる。中窪勝彦さん(以下「東方」)、44歳。

9月6日、福岡県であった「第38回九州管内系統和牛枝肉共励会」に県代表として出場。畜産王国九州の「一頭を決める共励会」とも言われるこの大会で、最高賞の農林水産大臣賞を受賞した。祖父、父と3代にわたり、8回出場した大会。

悲願の最高賞に「今まで支えてくれた人に感謝したい」と笑みをこぼした。県立農業大学校を卒業後、家業を継いだのは20歳のとき。当時は、子牛を購入し育て売却する肥育だった。しかし、父の勝さんとともに新しいことに挑戦しようと、和牛繁殖と肥育の一貫経営を始めた。子牛は、成牛より病気やストレスに弱い。そのため、仕事の量、時間は各段に増えていった。忙しい中でも、細心の注意を払い、工夫を凝らし

ながら仕事に取り組んでいる。「えさの量の観察」「こまめな床の掃除」「扇風機を使い温度調節」「採血して栄養状態を確認する」など、上質な牛を安定して生産するため、できることを徹底。研修会に参加するなど情報収集も欠かさない。その成果もあり、牛肉のランクとして知られる「A5」「A4」の出現率は県内でもトップクラスになった。しかし向上心は尽きない。「まだまだ勉強していかないと」と語った。

東方小学校PTA会長やスポーツ少年団後援会長を務めるなど地域活動にも積極的に参加。「人とのつながりから学ぶことは多い。そしてなによりも楽しいよね」と人柄をのぞかせた。今、畜産は配合飼料の価格高騰など厳しい状況にある。しかし、中窪さんとはどんな逆境にも負けない。畜産のまち「小林」を支える一人として「みんなで切磋琢磨しながら、日本一の宮崎牛を全国に届けたい」と言葉が強めた。

# 祖父、父の思い受け継ぎ 果たした悲願の最高賞



第38回九州管内系統和牛枝肉共励会  
農林水産大臣賞受賞

和牛農家  
なかぐぼ かつひこ  
中窪勝彦さん